

2014 全道合研 家庭科教育分科会

「家庭科で何をどのように教えるか／学ぶか」の探究

青木香保里

一 はじめに

分科会は、共同研究者の内藤しをり氏（小清水高校）による基調提案がなされ、その後、参加者の自己紹介と交流がとほかられた。参加者は二日間で延べ二十人、レポート5本の報告があった。

次期学習指導要領の改訂を目前にして、子どもをめぐる問題、経済や地域など社会をめぐる状況などが一層のこと複雑化し、混迷するなか、「家庭科で何をどのように教えるのか／学ぶか」の探究のもと、今年度も確かな歩みを重ねる実践が報告された。以下、レポート報告に基づき、成果と課題を述べる。

二 実践報告

1 「発達のすじみちを意識しながら」

（檜山・せたな町立大成中学校 日下恵子）

中学校家庭科には「家族・家庭と子どもの成長」という単元がある。実践者の問題意識は、レポート冒頭に集約されている。

生徒たちは家庭の中で生活を営んでいるが、それぞれの家庭のスタイルは多様であり、デリケートな問題を持つ家庭も存在する。真正面から「あなたの家庭を振り返りなさい」という学習では、居心地の悪さを感じながら学習に参加する生徒もいるのではないかと考える。

また思春期を迎え、自分を捉えることができずにイライラした様子が見うけられることもある。

そのような生徒に対し「家族を考えましょう」「子どもの成長を学習します」と投げかけても、必ずしもそれらの課題に向かうとは限らな

い。

(日下レポート1頁)

実践者は学習課題に生徒の距離を少しでも縮められるように、と願いながら、「効果的な資料や教材の提示」と「思考の流れをイメージした展開」を重視し、「子どもの成長過程」の指導過程を構想し、単元の指導展開を行った。単元の概略は以下の通り。

- ①「人の一生」の現在位置を知る
- ②子どもの成長を予想する
- ③幼児の発達の特徴を学習する
- ④保育園訪問に向けて
- ⑤保育園訪問
- ⑥体験のまとめと交流

単元の指導過程では、①において資料の読み取りから、実感を持って捉えた箇所を交流しあい、これを基盤として共有しながら、②と③が展開する。②では、職場の同僚が授業への協力として提供してくれた写真(胎児～小学校入学まで)と、写真の一つひとつに添えられた発達の特徴を示すコメントをもとに、発達の順序を予想しながら並べていく。写真という具体性を伴った画像を通して予想するため、子どもの発達をイメージしやすく、添えられたコメントから養育者(親)の温かな思いが子どもの発達を願う気持ちをつかんでゆく。②のような具体的な発達事例と並行する形で、③では、教科書の記述「体の発達」「心の発達」「遊びと発達」を学習し知識を広げるとともに、学習者自身が幼少時の遊びを思い起こし、交流することを通して、知識が実感を伴いながら実体化する。④では、実践者が最も大切にしている生徒に伝えたい心構え「幼くても一人の人格を持った存在です。決してバカにしたり笑ったりしないで下さい。それは幼児に伝わります。」

を柱にしなが、保育園訪問に際しての観察の視点、心構えが丁寧に語られる。子どもを大切に思うということと、子どもの気持ちを汲みとること、子どもに寄り添いながら同じ空間に居ること、子どもを尊重することなどが二重三重の螺旋となり、保育園訪問に向けての意識が形成される。⑤の保育園訪問では、生徒のそれぞれのペースが尊重される。観察の視点（身体の様子・行動の様子・言葉の様子など）を意識し、幼児との関わりが促される結果、帰り際の園児たちによる「また来てね～」の声は、充実感の広がる生徒の表情を引きだし、「ふれあって学ぶ」本質が体得される。

2 「消費生活分野におけるカルタの作製」について

福間あゆみ（北海道滝川西高等学校）

近年の振込め詐欺に代表されるような詐欺防止の影響もあるのか、教科書の内容が消費者教育を深く学ぶように編集されていると分析する実践者の問題意識が起点となり授業が構想され、楽しい実践が展開する。実践の背景を、次のように述べている。

特に、2000年以降、消費者に関わる法律も多く制定され、教える側もよく勉強していけないことを痛感している。これまでは、教科書中心の授業を行っており、生徒はなんとなく理解はするが、自分自身のこととかけ離れた内容であると捉えているようであった。今年は、問題商法などを自分の言葉でよく考えて欲しいということから、カルタ作りを取り入れた。

実践者は、被服や調理の分野に比べ、家庭経済の分野では、なかなか実習を取り入れにくく、視聴覚教材や消費者協会等の資料を活用しているものの、教科書とノート、教師の一方的な働きかけに終始しがちであることが課題であると考えていた。

また、教師による一方的な授業ではなく、生徒が自らの問題として考えたいような内容や方法を授業の目的と関係づけながら指導過程を再検討する必要があると考えていた。教育内容および指導過程の再構成により、楽しい家庭科の授業の創造と家庭科の良さ（独自性）の探究が目指されているといえる。

「カルタづくり」の授業の概要は、次の通りである。授業は、1年普通科「家庭基礎」の単元「経済生活をつくる」のまとめ（2時間）、および2年情報ビジネス科「生活デザイン」の単元「消費者として自立する」のまとめ（3時間）として実施された。授業の展開は、①グループを作る、②班長を決める、③何を担当するか班長がくじを引く（1班あたり5つの語を担当）、④決められた語でカルタを作る（基本は、5・7・5。生活に関することでもよい）、⑤読み札と絵札を作製する、⑥カルタ大会、の計画のもと進行する。レポートには、生徒の作製したカルタの読み札と感想、カルタ大会の様子が写真に添えられたコメントとともに掲載されている。

作品は、㊦「セールスに 惑わされずに 見極めよ！」㊧「待ちなさい あなたの選択 正しいの？」㊨「保証人 になったら最後 破たんする」㊩「楽しんでね 高収入は 得られない」のように、単元で学んだ内容が「カルタ」へと総合された力作が並ぶ。また、カルタ大会の様子は、「カルタの読み札は放送局員が読んでくれ」、「男子も女子もみんな真剣」で、「ハエタタキを使ってやる」ほどの熱気にあふれ、集中と白熱に満ちた教室風景が、臨場感を伴って伝わってくる報告であった。実践者は、実践を振り返りながら、次の課題設定を以下のように述べる。

今後、この内容を教室だけに終わらせず、作ったカルタを利用した取り組みを実施したいと考えている。実際には高齢者の方々との交流

授業などを通して活用していけば、高齢者の分野においても有効なのではないだろうかと思う。しかし、地域の老人クラブや学校内での調整も必要であり、なかなか実現に至っていない。(保育実習は市役所のご協力のもと7クラス全ての生徒が体験できている)もちろん移動手段や実施時間等について検討が必要であるが、一番大切なことは普段から地域のお年寄りの方々と教師自身も交流し、身近な関係になっていく必要があると痛感している。もっと教師も地域に出ていき、地域の人と関わり、地域の現状を知り、地域で育つ生徒をどのように育てて行きたいか普段から語り合うなどしていくことが大切であると思う。

家庭科の授業が生徒と地域をつなぎ、家庭科の授業を含めた学校の教育実践と地域づくり、人づくりなど、地域の教育計画と地域に暮らす住民の課題として設定が語られている。家庭科で何をどのように教えるのか／学ぶのかを、個人の発達と地域づくりの課題をむすぶものとして捉えた実践者の次なる報告が楽しみである。

3 「家庭総合におけるこの間のとりくみから」

岩佐美和子（北海道雄武高等学校）

学力テストを受けてきた世代の生徒を前に、評価を気にする傾向やこれまで以上に生活経験の不足にある傾向があることや「ものがあってあたりまえ、何でも準備されていて当然といった環境の中で育ってきた」状況を問題であると考え、家庭科の実践が取り組まれる。このような問題を受けとめながら、場合によっては、家庭科の実習において「少し不便を感じさせたり、面倒だけどみんなですらなくてはいけないということを感じさせる」必要を実践者は抱いている。

問題解決を目指した取り組みとして、教科指導の中に新しい内容を

取り入れたり指導方法を工夫したり、評価方法を工夫（記録シートや振り返りシート、調理記録や評価表）する一方で、「考えて書く」「具体的に書く」など指導・助言を教科の目的に照らしながら細やかに行っていることが報告された。

教科指導の場面のみならず、学校生活のあらゆる場면을捉え、「生徒たちの持つ課題を少しでも解決できるよう」日々の実践を積み上げていく日常の取り組みのもつ大切さについて、参加者一同が改めて確認する報告であった。

4 繊維・糸・布をめぐる家庭科教科書記述の検討と実践

増渕哲子（北海道教育大学札幌校）

教員免許状更新講習等、研修の場面で取り組んでいる実践の一例として、小・中・高校の家庭科教科書にみる繊維・糸・布をめぐる記述の現状と課題について分析した結果についての報告、および糸紡ぎ・フェルトづくり・布づくりの事例が、パワーポイントのスライド印刷資料をもとに報告された。

教科書記述にみる字句や概念などが、最新の研究成果が反映されたものであるのか、また厳密さを有するものとして把握されているのかについて、家庭科は一層のこと留意を払いながら教育内容研究をすすめていく必要があるといえる。

5 思考停止をしない授業の試み（未完）

石川幸孝（北海道札幌工業高等学校定時制）

教科書について、「生徒にとって何かしら思考のきっかけとなり、あるいは思考の手助けになるものであればよい」と考える実践者は授業において、①生徒への問いかけ、②具体的な事例の提示、③応用（演

習)・単元間の繋がり)の3点が必要であると考え、意識しているという。また、思考を積み重ねる学習が、さまざまな価値判断の基礎となり、生徒の生きてはたらく力になると実践者は考えている。

思考を積み重ねる学習の大まかな枠組みは、「基本がわかる」「構造がわかる」「成り立ちがわかる」である。自分自身で考え、少しでも良くしたい、改善したいという意識が次なる思考へと連鎖するような教育内容を有した教材や単元構想が実践報告として紹介された。

例えば、「住の変遷」では、重ね合わせて見えてくる家族関係の変化から、個人や社会の変動する価値観の反映をよみとり、絶えず動いている社会とその中にある個人や一人ひとりの人間の暮らしや営みがどのようなものとしてあるのかを考えてみる。

また、「慣習と習俗」では、法律や歴史、経済などと交差させ、日常生活のなかにある道徳や習わし、価値など取り上げ、「あたり前のあたり前を焦点化し、あたり前に対する無自覚を意識化」するなど、批判的に見ることを、考えることを目的としている。「高齢者」では、高齢者の置かれている背景や高齢者をめぐる歴史になどを関連づけながら、社会と個人の間を考察する。といった具合に、歴史的なものの見方、本質は何であるのかを考えさせる一方で、考えさせるだけでなく、考えたことを表現すること・できることを目指しつつ、表現する場を設けるなど、思考の場を授業の目的に照らしながら、内容と方法を連結させ一貫したものとして指導の展開されていく。

今回の報告テーマに(未完)の文字があることから、今後の探究と続報が待ち望まれる

6 男性教員に『育児休業ノススメ』

小堀智博(北海道壮瞥高等学校)

レポートは第17分科会「地域における子育て・学習活動」において報告され、その内容から第10分科会「家庭科教育」2日目午後に急きょ報告をお願いし、報告が実現した。

報告は、「1自己紹介」「2育休取得まで」「3きっと気になると思うので（育休中の生活の実際）」「4育休を取得して」「5復帰後に予想していること」「おまけ 育児中の女性に『イクメンの作り方』」で構成され、実践者の育休実践に裏付けられたユーモアと温かみのあるドキュメンタリーのもつ具体性に、参加者一同、圧倒された。と同時に、育児休業をめぐる権利の獲得が、一步一步の歩みを重ねながら確実に前進し、歴史を塗りかえ、歴史をつくっているのだ、という思いを抱く機会となった。

1日のみの育休取得を含んでも男性教員の育児休業取得率は2%にすぎない。育休を取得して、「公共施設から見える『育児担当≡女性』の現実」はなおも根強く、主婦が育児や家事が担って当然という空気が社会の至るところに存在する現実がある。

子育てや高齢者をめぐる問題など、社会の進展とともに生活問題や生活課題が山積する現在、市民運動や組合運動など生活に根ざした最新の取り組みをキャッチし、教育内容研究に取り込んでいく意義を再確認するとともに、取り組みの成果が着実にダイナミックに社会を少しずつ少しずつ変えていくという迫力と面白さを、いかに授業のなかへ反映させていくかが今後の課題である。

三 まとめにかえて

日下恵子氏のレポートの結びをここに記しておきたい。幸せを感じながら生活するには、「どんな気持ちでいて、どのような事ができればいいのか」。そして、「どのような状態を作り出せばいいのか」。家

庭科の授業を考える根本をここに置きたい。子どもの発達のすじみちを考え、それに重ね合わせることができるような学習を大切にしたいと思う。

家庭科が教育内容研究の対象とする生活は絶えず変化する。「家庭科で何をどのように教えるか／学ぶか」は旧くて新しいわれわれへの問いであり、その問いを探究しながら、よりよい家庭科、より楽しい家庭科、より面白い家庭科を創造しよう。

(愛知教育大学 青木香保里)